

2

月27日、安倍晋三首相は新型コロナウイルス対策だとして、唐

突に根拠のない「全国一斉休校要請」を行なった。翌28日文科省は一斉休校を求める通知を发出。全国で99%の学校がこれに従った。当初春休みまでとされた休校は、4月7日の緊急事態宣言、16日の宣言の全国拡大、5月4日の宣言期間の延長に伴いずると長期化。大半の学校が5月末まで休校を続けた。3カ月もの休校で多くの子どもたちに、学習の遅れ、体力の低下、ゲーム依存などの問題が生じ、給食が食べられず飢える子どもや家庭で虐待に晒される子どももいた。6月に学校が再開すると、今度は学校へ行けない子どもが出てきた。中学生の自殺も起きた。各学校は土曜授業や夏休みの短縮などで授業の遅れを挽回しようとし、子どもたちには「授業地獄」が待っている。これらはすべて安倍首相が引き起こした人災だと言つてよい。

各学校・教育委員会は休校中の学習保障のため、試行錯誤しながら様々な手立てを講じたが、予期せぬ結果だったのは、不登校の子どもが休校中の登校日やオンライン授業には積極的に参加する例が見られたことだ。日常（登校）と非日常（不登校）が入れ替わったとき、新たな学び方が見えてきた。

# 前川喜平

まえかわ きへい  
元文部科学事務次官、現代教育行政研究会代表。

## 「学校とは何か」を問い直す

学校再開を単なる元の日常の回復ではなく、学校を相対化し「学校とは何か」を改めて問い直す機会にするべきだ。以下はいずれも、学校を問い直す本である。

イヴァン・イリッチ『脱学校の社会』(1977年)。「学校化」によって「生徒は教授されることと学習することとを混同する」ようになる。「学校は、学習は教授の結果であるという公理に基づいて設けられた制度である」が「それ(その公理)を否定する証拠がたくさんある」われわれが知っていることの大部分は、われわれが学校の外で学習したものである」

黒柳徹子「窓ぎわのトットちゃん



『脱学校の社会』  
イヴァン・イリッチ=著 東洋・小澤周三=訳  
東京創元社  
1700円+税  
ISBN978-4-488-00688-4



『窓ぎわのトットちゃん 新組版』  
黒柳徹子=著  
講談社文庫  
760円+税  
ISBN978-4-06-293212-7



『学校は必要か 子どもの育つ場を求めて』  
奥地圭子=著  
NHK出版  
870円+税 品切れ  
ISBN978-4-14-001655-8



『「学校」をつくり直す』  
苫野一徳=著  
河出新書  
840円+税  
ISBN978-4-309-63105-9

ん(84年)。小学1年で公立学校を退学になったトット(著者)の転校先がトモエ学園。電車6台が教室。座席は決まっていない。時間割に沿った一斉授業はなく、一人一人の子どもがやりたい課題をやりたい順にやる個別学習。大

分でなくなる気がする」という著者の長男の不登校にあった。

正自由教育の流れを引くトモエ学園で、小林宗作校長のもとトットはのびのびと遊び学ぶ。奥地圭子「学校は必要か 子どもの育つ場を求めて」(92年)。フリースクールの「老舗」東京シューレの開設間もないころの様子を描かれている。「自由・自治・個の尊重」を理念とする東京シューレの原点は、「学校へ行くと自分が自

苦野一徳「学校をつくり直す」(2019年)。学校教育の本質はすべての子どもに「自由」に生きられる力と「自由の相互承認」の態度を育むこと。そのためには「みんなで同じことを、同じペースで」学ぶことから脱却し、「探求」を核とした「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合」が必要。そこでの教師の役割は「共同探求者」だ。

脱ゆとり教育以来、競争主義と全体主義が蔓延する日本の学校。今作り直さなければ子どもたちのエクソダスが起ころう。